

台湾の「海女(ハイルー)」に関する民族誌的研究

——東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指して——

期間：2018年4月1日～2022年3月31日

〔代表者〕藤川美代子（南山大学）

〔共同研究者〕

藍紹芸（台湾基隆市八斗子漁村文物館）

新垣夢乃（跡見学園女子大学）

許焜山（台湾基隆市八斗子漁村文物館）

齋藤典子（東洋大学）

沈得隆（台湾基隆市八斗子漁村文物館）

兪鳴奇（中国海洋大学）

安室 知（日本常民文化研究所）

2021 年度活動報告

研究代表者 藤川 美代子

本共同研究は、1）台湾の海付きの村を対象に、海女の潜水漁・海藻の手繰り寄せ・その他の漁撈活動をめぐる民族誌的調査を実施し、それを「村のくらし」全体の中に位置づけて描くこと、2）漢族研究の文脈で台湾の海女民俗を捉えるための視座を獲得すること、その上で3）台湾の事例を日本の海付きの村と比較しながら、東アジアあるいは環太平洋島嶼部全体を射程に入れた新たな形の「アマ研究」模索のための足がかりを掴むことを目指し、2018年度より始動した。

最終年度の2021年度は、本来であれば2018～2020年度の3年間にわたる活動の成果報告に充てる年となるはずだった。しかし、COVID-19感染拡大により予定していた調査・研究活動の大部分を断念せざるを得なかった2020年度の影響を受けて、2021年度は日本・台湾間の境界を（研究者が物理的に）跨がぬ形での調査・研究と、成果報告の二本立てで活動をするようになった。2021年度内の特筆すべき取組みは、以下のとおりである。

A）静岡県下田市須崎での地方文書整理：7月と10月の2回にわたり、静岡県下田市須崎において、テングサ漁の歴史や漁民社会の構造を知る上で重要な史料群の写真撮影・目録整理などを実施した。「下田市須崎区有文書」と名づけられたこの史料群は、1590年（天正18年）から1962年



写真1 漁民会館を使つての地方文書撮影
(齋藤典子撮影)

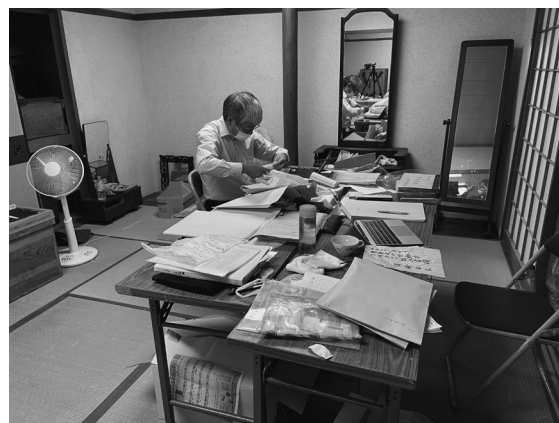


写真2 虫食いと糞だらけの「紙」を丁寧に剥がし、目録を採る
(齋藤典子撮影)



写真3 新たに見つかった重要文書（齋藤典子撮影）



写真4 文書について話し合いの機会が得られた若手区民との懇談会（藤川美代子撮影）

（昭和37年）までのおよそ370年間にわたる多種の地方文書である。数年に一度、虫干しを行うなど、地元では保護管理に努めているが、経年劣化による虫喰いや湿気で、保存状態は良好とは言えず、保管場所の是非についても所有者である下田市須崎区協議会の懸案事項となっていた。2021年度は、齋藤典子、藤川美代子に加えて、地元の有志と石川亮太氏（立命館大学経営学部教授）、古谷野洋子氏（日本常民文化研究所特別研究員・民俗研究者）、古谷野昇氏（民俗写真家）、塚本明氏（三重大学文学部教授）といった研究者の協力を得ることができた。

B) 静岡県下田市須崎での現地調査：7月と10月の地方文書整理の際には、合間の時間を利用して須崎のテングサ販路に関する調査を実施した。須崎の海女や海士が採ったテングサがどのようなルートで消費地に運ばれ、製品として加工されて消費者に供されるのか、南伊豆仁科にある伊豆漁業協同組合西伊豆統括支所と、須崎のテングサ仲買人（2名）、下田市で須崎産のマクサを用いてトコロテンを製造する商店にお話をうかがった。

C) 第10回共同研究フォーラム「台湾の『海女（ハイルー）』に関する民族誌的研究」：

2022年1月29日（土）13:00～17:45に、Zoomを利用して本共同研究の成果報告会を開催した。フォーラムには、調査と映像撮影にご尽力いただいた許翠庭氏（台湾大学生態学與演化生物学研究所・修士）と張緯誌氏（ドキュメンタリー映像監督）をお招きした。プログラムは以下のとおりである。



写真5 船かつぎに向かう須崎の若い海女さん（飯田竜氏撮影）



写真6 船上からコンプレッサーで送られる空気を吸いながら海藻や貝を採る「面水漁法」に使用するマスクとメガネ（齋藤典子撮影）

1. 安室 知「開会のあいさつ」
2. 藤川 美代子「共同研究のねらい、海女とは誰か」
3. 新垣 夢乃「なにが台湾の「海女」を沖へと押し出したのか？：日本統治時代の石花菜資源をめぐる葛藤と技術の伝播」
4. 許 翠庭「台湾東北角における海藻の民俗分類と自然環境に対する人々の認識」
5. 齋藤 典子「台湾・東北角の海人（アマ）の漁撈行動と海洋資源をめぐる考察：台・日・韓の潜水採藻漁における漁場利用と漁場政策の対照比較」
6. 許 焜山・藍 紹芸「台湾東北角の海藻採集（潜水／非潜水の採集方法・道具・料理法）」
7. 藤川 美代子「『よい石花菜』とは何か」
8. 映像『去海拿東西の人（海に行き、ものをとる人）』（日本語字幕版）
9. 張 緯誌「映像撮影にあたって」
10. 安室 知「コメント」
11. 質疑応答、総合討論
12. 安室 知「閉会のあいさつ」

日本各地・台湾・韓国・インドネシアなどから約70名にご参集いただいた。質疑応答、総合討論では、「台湾での「海女」の社会的地位はどのようなものか」「日本統治時代に台湾でテングサ採集に従事していた「琉球人」とは、沖縄県内のどこの出身者が多かったのか」「台湾では生海苔を食べる習慣はあるか」「台湾におけるテングサの「商業的採集」（タンクを用いた潜水による大規模な採集）はいつから本格化したのか。そこに沖縄の人々の影響はあったのか」「海女」の仕事は危険だと思うが、台湾の「海女」は日本でいう保険のようなものに加入しているか」「映像『去海拿東西の人（海に行き、ものをとる人）』の撮影中に、海女・素潜りの男性・ダイバー・原住民男性の水

中での作業について気づいた点があったら教えてほしい」「台湾東北角におけるテングサ漁や海藻の民俗分類については詳細な報告がなされていたものの、「海女」とは誰なのかという点については謎が深まる一方だった。謎を解く鍵は、自己認識と他者表象を区別して分析することにあるのではないだろうか」といった問いが各発表者に向けられ、活発な議論が展開された。

D) 国際常民文化研究叢書15『台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究—東アジア・



写真7 フォーラムのポスター



写真8 フォーラムでの討論の様子



写真9 映像『去海拿東西の人（海に行き、ものをとる人）』の上映

環太平洋地域の海女研究構築を目指して―』：3月に、本共同研究の成果報告書を刊行した。藤川・新垣が2015年に台湾澎湖諸島の七美嶼を訪れた際、ウニを捕るために今まさに海に潜らんとする女性たちと出会い、彼女たちは台湾語で「hai lu」（漢字表記：海女）と呼ぶのだと教えられた経験を、齋藤が2015年、台湾の海女を探しに北海岸の新北市金山区や宜蘭県蘇澳鎮南方澳を訪れ、めぐりめぐって新北市貢寮区澳底の海女のもとへたどり着いたのだが、言葉ができなかったので意思疎通が難しく悔しい思いをしたという経験をもっていたことから企画が始動した本共同研究。齋藤を除いて「海女」やテングサ漁に関する知識をほとんどもち合わせていなかった台湾側・日本側のメンバーが、4年という短い期間に共にフィールドワークを行ない、それぞれに新聞資料や先行研究の読み込みを進めながら、微力ながらも台湾東北角の「海女（ハイルー）」について理解を深めてきた成果をまとめることができたのは幸いである。本共同研究によって、各メンバーの研究は緒に就いたところであるとの自戒を込めて、多くの皆さまからこの研究叢書に批判と教示をいただけるよう切に願っている。

最後に、本共同研究のすべての調査・研究活動に陰・日向でご尽力くださった国際常民文化研究機構の皆さま、フィールドワークや資料調査の現場で私たちを招き入れてくださり、お話を聞かせてくださった皆さま、フィールドワークやフォーラムの場で通訳をお引き受けくださった皆さま、研究叢書の内容の翻訳にお力添えくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

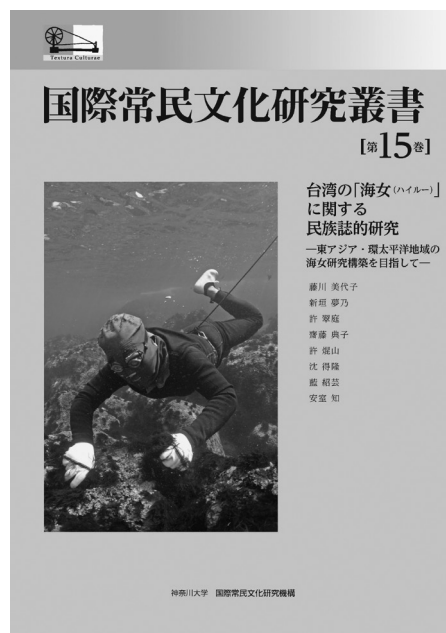


写真10 国際常民文化研究叢書 15
(2022年3月)

■ 2021年度の活動

- 伊豆須崎区有文書第1回撮影作業、須崎のテングサ販路に関する調査 2021年7月25日～31日 藤川美代子・齋藤典子 調査協力者／古谷野洋子（日本常民文化研究所特別研究員・民俗研究者）・古谷野昇（民俗写真家）・石川亮太（立命館大学経営学部教授）
- 須崎区有文書第2回撮影作業と次世代を担う地区民と文書の保存活用について懇談 2021年10月29日～11月3日 静岡県下田市須崎地区 藤川美代子・齋藤典子 調査協力者／古谷野洋子・古谷野昇・石川亮太、塚本明（三重大学文学部教授）
- 第10回共同研究フォーラム「台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究」 2022年1月29日 藤川美代子・新垣夢乃・齋藤典子・許焜山・藍紹芸・許翠庭（台湾大学生態学與演化生物学研究所・修士）・張緯誌（ドキュメンタリー映像監督）オンライン開催
- 『台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究』国際常民文化研究叢書 15 2022年3月15日